

北海道情報大学

同窓会
会報 Vol.14発行：平成28年12月1日
北海道情報大学同窓会食の力と
ICTを活用した
コミュニティーヘルスの
取り組み北海道情報大学 医療情報学部長
健康情報科学研究センター長

西平 順



我が国の平均寿命は男性女性とも80歳を超え、世界第一位の長寿国となっています。高齢化に伴い、生活習慣病や認知症の増加は、健康寿命延伸の大きな妨げとなっており、この対策に充てる医療費や介護費用は国の財政を著しく圧迫し、また介護する家族への身体的かつ精神的な負担になるなど深刻な社会問題となっています。

北海道情報大学健康情報科学研究センター（以降、本研究センターと略）は、これらの地域が抱える課題について大学と行政が情報を共有し、健康的で暮らしやすい地域社会を築くため、本学が有する食の力と情報通信技術（ICT）を活用した先進的なモデルの構築を目指しています。

食を活用した地域住民の健康の維持増進を実施するには、食材の科学的エビデンスの蓄積とICTの活用が必要です。本研

究センターは、ヒトを対象にした食品の機能性に関する研究活動（食のヒト介入試験「江別モデル」）から、膨大な食と健康に関する情報を蓄積しており、この情報量が「食と健康」の研究基盤になっています。本学には、平成25年から栄養学分野の専門教員も加わり、学術的な面からも食による健康のプロモーションに取り組んでいます。平成28年9月現在、ヒト介入試験に参加する登録ボランティアは約6,500名に達し、55件以上の機能性食品のヒト介入試験を実施しています。

食のヒト介入試験「江別モデル」は、大学と地域行政機関が連携して初めて構築したシステムであり、北海道だけでなく全国の自治体から強い関心が寄せられ、これまで20以上の道外の自治体から視察を受け入れています。本研究センターは、北海道の企業はもとより道外の多くの公的機関や民間の食品研究機関が利用しており、食品の安全性と機能性の評価系として全国的にも中核的かつ重要な役割を担っています。

他方、本研究センターはICTを活用した住民の健康維持にも貢献しています。住民の健康状態を把握し、適切な健康支援を行うには、ICTの活用が不可欠です。そのため、ICTを活用して栄養学的な観点から健康アドバイスを実施し、住民の健康増進と生活の質の向上に取り組んでいます。具体的な例として、食のヒト介入試験「江別モデル」から得られた個々人の臨床データをもとに機械学習によるレコメンドシステム（LIR）を開発し（総務省SCOPE事業）、スマートフォンなど通信機器を活用した栄養指導を実施しています。

今後、さらに食のヒト介入試験「江別モデル」とICTとの融合に取り組み、食の力とICTを活用した新しい地域健康モデルの構築を進めて行きたいと考えています。